

トフル成績から見た熊本大学学生の英語聞き取り能力

荘口博雄・福田昇八・T. ラスカウスキー
池田志郎*・井原 健*・松瀬憲司*・A. ローゼン*
斎藤 靖*・里美繁美*・鈴木蓮一*

Listening Comprehension Ability in English of Kumamoto University Students as Seen in TOEFL Scores

Hirowo SOHGUCHI, Shohachi FUKUDA, Terry LASKOWSKI,
Shiro IKEDA, Takeshi IHARA, Kenji MATSUSE, Alan ROSEN,
Yasushi SAITO, Shigemi SATOMI and Ren-ichi SUZUKI

(Received September 2, 1996)

Beginning with its 1997 entrance examination, Kumamoto University has decided to include a set of listening comprehension items in the English Language test. The introduction of a listening comprehension component in the university entrance examination is expected to improve students' listening and speaking abilities. The Pre-TOEFL Institutional Testing Program was administered in April 1996 to one first year class of each of the seven faculties. Our findings include: 1) the average score of all 294 examinees was 409.1 out of a possible score of 500; and 2) the average score of each of the three sections of listening, structure, and reading was 39.8, 42.0, and 41.0, each out of a possible score of 50, respectively. These and other figures obtained can be used as basic data in our future investigation of project years 2, 3, and 4.

Key words: entrance examination, listening comprehension, testing

0 目的と意義

熊本大学では、1997年度の個別入学試験から、英語に音声テストを導入することになった。音声テストは、英語専攻の学科に限ってはすでに多くの大学において導入されているが、入学試験に英語を課するすべての学部において実施しているのは東京大学だけである。全国的に2番目となる熊本大学では、音声テストの導入が聞き話す英語の達成にいかに関与するかを証明するために、その成果を調査することになった。

大学の入学試験は高校教育を左右すると考えられている。日本人が英語で聞いたり話したりできないのは、大学入試に音声テストがないからであると言われる。「入学試験に出ないものは教えない、入学試験で点数にならないものに時間を割く余裕はない。」というのが、聞き話す英語を無

* 熊本大学教養部
教育研究学内特別経費による調査報告(1)

視する高校側のこれまでの言い訳であった。だから入学試験での音声テストの導入は、高校の英語教育に決定的な影響を持つはずである。実際、熊本大学への進学希望者が少しでもいる高校では、これに対応するために、すでに音声面での指導を一斉に始めているという。この措置が大きな影響を及ぼしていることは高校側からの話でも明らかである。このような音声テスト導入の成果をトフルという国際的な基準によって示すのが、この研究の目的である。入学試験に音声テストを取り入れることが話す英語の力を増進するのいかに効果的であるかを統計的に示し、その結果を公表することによって、このような音声テストが全国の大学において実施されるようになることを願うものである。

1 音声テスト導入決定から実施発表までの経過

音声テストの導入は、戦後の英語教育の一つの大きな柱としてこれまで検討が行われてきた。一時は、大学入試センターの試験に取り入れることが真剣に討議され、1982年(昭和57年)にはセンターに音響学や医学の専門家をメンバーとする検討委員会が設置された。この委員会の2年間にわたる調査結果は、報告書として公表されている。当時は30数万人の受験者であったが、それでもすべての試験室において完全な平等を確保することの困難から、取り入れは見送られた。その後、受験者数は50万人台へと急速な増加を見、これに対応する会場の準備は不可能となり、入試センター試験への導入は見込みなしの状態になっている。

一方、1985年に東京大学が音声テストを個別入学試験に取り入れることを決定し、1988年から実施している。公表されてはいないが、東京大学の英語問題で音声テストの比重は、10%程度から始まり、現在は25%程度になっていると推測され、東京大学への受験希望者がいる高校では、そのための準備が行われている。

音声テスト導入が熊本大学英语部会の決議として合意を見たのは、1991年(平成3年)秋のことである。部会の了解を得るには、実施が円滑に行く見通しがなくてはならないが、すでに東京大学の実績があり、必要な情報は入試課を通じて入手できるということで、遂に合意に至った。この部会合意に基づき、英語部会から音声テストの導入が入試専門委員会(委員長は中島最吉学生部長)に提案され、翌年5月、この委員会では、各学部の意向を取りまとめた上で、可決された。次に入学試験に関する最高機関である入学試験管理委員会(委員長は森野能昌学長)に提案され、直ちに大学の方針として最終的に決定された。これを受けて翌年度には、事務の代表を加えた英語聴解力テスト実施検討委員会が組織され、機種選定と予算要求へ向けて準備が始められた。

2 テスト方式と機器の設備

音声テストの方式としては、英語部会からすでに実績のある東京大学方式によることとして提案されていた。これは試験会場ごとに独立した放送室(語学演習室など)を設け、これと会場内の各試験室を有線で結び、テープで問題を流すというものである。さらに、試験室には席の位置による不公平がないよう、20人に1つの割合で天井にスピーカーが設置されている。

この方式の利点は、各試験室の監督官をわずらわせることなく、試験会場単位で集中管理して

音声テストが実施できることにある。試験の注意事項の伝達も、各試験室の試験監督者を煩わせなくて直接に音声によって行えるから、監督者に余分な負担をかけなくてすむ。

熊本大学の試験会場としては文・法学部、教育学部、工学部、教養部の4つがある。工事は予算の都合で1995年度と1996年度の2年度にわたって行われ、1996年8月までにすべての工事が完了した。

3 音声テスト実施の公表と実施に伴う予備調査

音声テストの実施は、1年前に高校側に発表することになっている。ただし、文部省の指導により、(1) 音声テスト実施の発表は工事が完了してから行い、(2) 発表の翌年度入学試験から実施することになった。こうして教養部会場と工学部会場は1997年(平成9年)2月の試験から、文・法学部会場と教育学部会場は1998年度試験から実施となり、これは1995年11月に発表された。こうして大学の正式決定から5年後に、最初の音声テストが実施される運びになったのである。

このようにして熊本大学は、英語音声テストに関しては全国で2番目の国立大学となるので、その成果を実施の前年度から始めて、実施後も引き続き数年間にわたり統計的に調査し、他の大学での導入の参考となる資料を当初から準備する必要があると判断された。そこで英語教官の中から共同研究者を募って荘口博雄を代表とする研究班が組織され、1995年度学内特別研究費を受けて「英語音声テストの導入に関する調査研究」が行われた。これによって音声テスト実施前の1996年入学の学生を対象に4月下旬にPre-TOEFLを実施し、実施後の成績と比較するための基礎資料を得た。以下、その結果を記す前に、このテストについて説明しておかねばならない。

4 Pre-TOEFL とは何か

音声テスト導入の成果を知るには、実際に出題された問題の点数を比較するというのが一つの方法である。これが最も単純な手段であり、実施後にはそれが可能になる。ところが、これは年度による難易度の差があるから、必ずしも正確な測定にならない恐れがある。そこでより客観的な基準によって成果を測定するために、国際的な英語能力テストとして広く利用されているTOEFL(日本語の公式表記はトフル)を使用することにしたものである。TOEFLはTest of English as a Foreign Languageのことで、外国語としての英語能力を、聞き取り能力(Listening Comprehension)、文法/作文力(Structure and Written Expression)、読解力(Reading Comprehension)の3つの分野に分け、3分の1ずつの配点で評価するテストである。音声テストの占める割合はトフル全体の3分の1にすぎないが、これによって他の能力との関連において聞き取り能力を知ることができる利点がある。

トフルは3つの部ごとに20点から68点までの点を与えられる(厳密には24-68, 20-68, 21-67)。総得点はこの3つの得点を合計したものを10倍し、それを3で割ったもので、230点が零点、677点が満点となる。(このテストの標準誤差は14である。例えば、ある日のテストで450点であった者は、別の日には上下14点、即ち464から436の範囲になる。)

正規のトフルは毎月1回、金曜又は土曜に世界中の国々で一斉に行われる。これは受験料がかなり高く(8,700円)、申込から成績票の受取まで、最低3か月かかる。これにたいし、TOEFL ITP

(Institutional Testing Program) というのがある。これは主催団体が実施日を自由に定めることができ、受験料 (2,630 円。200 人以上は 2,270 円) をまとめて送金し、答案返送の 2 週間後には成績が送付されることになっている。さらに重要な点は、正規の TOEFL は 105 分テストで、90 分授業の通常の時間帯では実施できないが、団体主催のトフル(ITP)には Pre-TOEFL という 500 点満点の 70 分テストがある。両者の成績は平行することになっており、たとえば Pre-TOEFL で 450 点の者は、TOEFL でも 450 点を取れることになっている。

ただし、Pre-TOEFL は 500 点満点であることに限界がある。これは 3 つの部とも 50 点満点になっていて、それ以上の得点はない。どんなに能力の高い者でも、部門別には 50 点となり、総得点は 500 点以上にはならない。この意味では、高学力者については、Pre-TOEFL では正確な評価はできないのである。今回の調査は、この誤差を見込んでもなお Pre-TOEFL によって大学入学時の英語力がほぼ正しく評価できると判断して行ったものであるが、このことをこれまで本学の留学希望者 (留学経験者を含む) を対象に福田昇八がとりまとめて行ってきた TOEFL ITP の成績について検討しておこう。

- 1995 年度は 73 人が受験し、最高 567、最低 357 点であった。500 点以上が 17 人いるが、このうち、5 人はいずれかの部で 50 以下である。例えば、48/53/52 で 510 点になっているのを、Pre-TOEFL で評価すれば、50 以上はすべて 50 であるから 48/50/50 となり、総点は 493 点にしかならない。また 50/47/52 で 497 点の者は、Pre-TOEFL なら 490 点にしかならない。ただし、この表を見る限り、51 点以上の成績の者は、総合 487 点以下には 1 人もないから、これ以下の成績は正しく表れていることになる。
- 1996 年度は 103 人が受験し、最高 580、最低 347 点であった。500 点以上が 21 人いて、このうち 4 人はいずれかの部で 50 以下である。丁度 500 点の者 4 人について見れば、生の点は 46/51/53、56/47/47、47/50/53、48/53/49 である。これを Pre-TOEFL で評価すれば、487、480、490、490 となる。497 から 470 までの 20 人についてみると、Pre-TOEFL でも総点が変わらないのは 7 人で、残り 13 人は 3 点から 17 点の範囲で低く評価されることになる。さらに下の成績で、453 点が 443 点になる者もいる。

こうして見ると、1995 年度成績から判断する限り、487 点以下の者については、Pre-TOEFL で十分ということになるが、1996 年度については、450 以上の者について正しい評価が得られない場合がある。ただし、通常の時間帯で実施するためには、この簡便なテストを使用するほかないわけであるから、結論としては、どれかの部で 50 点を取ったすべての者を対象に、十分な時間が取れる日時を別に設定し、正規の TOEFL を改めて受験させることが必要ということになる。

5 予測された結果

今回は、音声テスト導入前の調査である。音声テスト (I) の成績は、文法 (II) 及び読解力 (III) の成績より劣るであろうと予測された。実際、来年度からの実施によって音声テストの成績が上昇し、それを今年度の成績と比較することによって、音声テスト実施の成果を示すことに、この研究の目的があるのである。

これは高校側が、実施前の学年には音声テストの準備を全く行わないという前提に立つ予測である。入試に出ないことは高校では教えないという前提に立つての推測である。ただし現実には、次のような現象がすでに高校で起きているので、入試に出題されないことは教えないという状況

はすでにある程度は改善されていると考えなければならない。

1. 新指導要領により、コミュニケーション英語に相当の時間を割くようになった。
2. ほとんどの高校に外国人助手（AET）が配置され、聞き話す英語の授業が行われている。
3. 東京大学希望者及び他大学英语コース希望者のために、音声テストが全校で日常的に数年前から行われている。
4. 熊本大学の音声テスト実施発表前から、その実施が近く公表される見込みであることを高校側が知ってその対策を始めている。

このような準備がすでに高校で行われているのならば、それはすでに聞き話す英語教育が現実に行われていることを意味し、それは喜ぶべきことである。それがどの程度の成果を挙げているかを、このテスト結果が明らかにするであろう。

6 音声テスト実施一年前の入学者の成績

第一回のテストは、1996年4月26日、熊本大学の平成8年度新入生を対象に、すべての学部が

表1 新入生の学部別平均点

学部	被検者数	I	II	III	総得点
文学	43	39.8	42.8	41.2	412.5
教育	41	39.2	42.4	40.2	405.8
法学	45	41.4	42.6	42.4	423.3
医学	33	43.2	47.4	46.3	444.2
理学	41	39.6	39.6	39.3	395.0
薬学	45	37.8	41.8	40.9	404.6
工学	46	38.7	39.1	38.3	387.0
合計	294	39.8	42.0	41.0	409.1
1	16	39.2	35.6	35.1	374.4
2	37	40.4	45.4	36.0	426.4
総計	347	40.2	42.2	41.1	411.8

(注) 1は再履修者、2は教育学部英語2年生

表2 学部別最高点/最低点/満点得点者数

学部	最高点	最低点	I	II	III	500
文学	453	350	0	6	0	0
教育	483	323	0	5	3	0
法学	480	367	1	7	1	0
医学	500	383	3	17	7	2
理学	447	333	0	3	0	0
薬学	453	367	0	4	1	0
工学	457	330	0	0	0	0
全体	500	323	4	42	12	2

ら1クラスを選んで実施された。表1は学部別の平均点を示す。表2は学部別の最高点/最低点と部門ごとの満点得点者の数を示す。

7 結果の分析

以上の結果から、次のことが分かる。

1. 新入生の平均は409点である。Pre-TOEFLで50点の得点がすべてTOEFLでは53点であると仮定して計算すれば、平均点は411となり、55点と仮定すれば412となる。熊本大学入学者の英語力がトフルで410点であることが、これによって実証されたことになる。
2. 満点を取った者の数を部門別に見れば、文法で42人(14%)、読解で12人(4%)であるのに対し、音声では4人(1.4%)である。これは聞き取り力の不足を示す。
3. 全学平均点は、文法と読解が42点と41点であるのに対し、音声は40点と最も低い。これは聞き取り力の不足を示している。音声テスト導入後は、音声部門の平均点が上昇すると予測される。ただし、平均が400点以下の理学部と工学部については、3部門間の成績にほとんど差はない。
4. 医学部33人のうち、3部門で50点を取った者2人を除くと、文法と読解の両方で50の者3人は、音声は44, 45, 40である。医学部全体の平均は、43/47/46となっていて、音声の低さは明らかである。このことは高学力者に対する音声訓練の余地があることを示している。
5. 学部別の成績は、個別試験の成績と高い相関がある。

8 国際比較

われわれの調査によって、熊本大学学生の入学時英語力が410であることが判明したが、これは国際的にはどの程度であろうか。TOEFL Test and Score Data Summary (1995-96 Edition)によれば、1993年7月から1995年6月までの2年間のトフル総受験者137万人余の平均は、音声52.1、文法52.7、読解51.9、総合522で、日本人274,350人の平均は49/50/49、総合494となっている。熊本大学は世界平均より110点、日本人平均より84点低い。トフル受験者は英語力に相当の自信を持つ留学希望者が大部分であるから、この差は当然であろう。熊本大学の平均点が410と判明したことは、日本の英語教育の大学入学時の到達点が国際的な数字によって示されたことであり、その意義は大きい。

9 今後の課題

本研究は4年計画の1年目であり、本年度得られた資料は、2年度以降の聞き取りテスト導入後の入学者の数値と比較して、導入の高校教育への影響を示そうとするものである。初年度の予備調査を踏まえて、今後この研究が取り組むべき課題として次のようなものが考えられる。

1. 質の高いテスト問題の作成。妥当性、信頼性の高い良問を出題することによって、高校側と生徒個人の音声問題への興味と関心を高める必要がある。
2. テスト全体に占める音声テストの比重。この比重は学校と生徒の努力に見合うだけのもの

あらねばならない。熊本大学の場合、初年度の導入は半分の学部に限られるので、当該学部の受験生は筆記試験の一部を音声テストとして受験することになる。

3. 出題方式. トフル同様に、二人の会話を聞いて内容を問うものや、まとまった話を聞いて内容を問うものなど、いろいろ考えられる。解答方法としては、トフルのようなマークシート方式と東大方式のようにある程度は各自が自由に答える方式が考えられる。コミュニケーションのテストとしてどのような形式が適当か、引き続き検討していかねばならない。
4. トフル成績と入学試験英語の成績との相関関係、及び各問の間の相関関係の調査。
5. 帰国子女. その英語力が外国生活で得られたと判断される者については、統計上は別途検討することが日本の英語教育の成果を測定するには望ましい。
6. 身体障害者及び聴覚障害者. 前もって申し出により特別の措置ができるよう検討しておく必要がある。

謝 辞

この研究は熊本大学教育研究学内特別経費の助成により行われたものであることを記してここに謝意を表します。

参 考 資 料

- 大学入試センター聴解試験プロジェクトチーム 1984 『共通一次学力試験の外国語の聴解試験についての調査研究（中間報告）』 大学入試センター
- 1985 『共通一次学力試験の外国語の聴解試験についての調査研究報告書』 大学入試センター Educational Testing Service. 1996 *TOEFL Test Score and Score Data*. 1995-96 Edition.
- Fukuda, Shohachi. 1977 'Aural Comprehension of English Teachers' *JACET Bulletin*, vol. 8.
- Heaton, J. B. 1988 *Writing English Language Tests*. New edition. Longman.
- Johnson, Keith and Morrow, Keith. 1981 *Communication in the Classroom*. Longman.
- Valette, Rebecca M. 1977 *Modern Language Testing*. 2nd edition. Harcourt Brace Jovanovich.
- 吉田一衛編 1984 『英語のリスニング』 大修館書店